

また「会える」日まで

安喜万佐子 2014 年度/米・ノーザンプトン 美術

ロックダウン前日。早朝の青橙色の光の中、空港に向かうタクシーの窓に映るロンドン
はことさらに美しかった。すでに人の気配はなく、わたしたちをのせた地面、その奥深く
の層に溜め込まれてきた時間が直接語りかけてくるような錯覚に陥った。

「手を洗いましょう。週末は母の日ですが、お母さんに会いに行ってはいけません。」ラ
ジオがマントラのように繰り返していた。

「ママはもういないから関係ないね。あんたは、くにに帰ったらママに会えるのかい？」
とドライバーに話しかけられ我に返った。「くにの母の日は5月なんです。」と答えた。

「此処での常識、他処では非常識。昨日の日常、明日の非日常。けれど、今日のロンド
ンは一層綺麗。」移民と思われるドライバーとそんなことを言い合った。

わたしたちが日常の中で、つい「世界」と思い込んでいるものは、「習慣」により作ら
れた領域が多くを占める。(中略) わたしが作品を通して行おうとしてきたことは、知ら
ず知らずに染み込んだ「習慣」を一時停止させる行動と時間の方法で、地の層のざわめき
と身体を触れ合わせ、明日の地層への意識を開くことだったのかもしれない。(2020年 秋)

上の文章は、2020 年秋に京都 2 会場で開催された個展リーフレットに、作家コメント
として書いたものです。

遡った話となりますが、文化庁新進芸術家派遣でお世話になったのは5年前。米国、ボ
ストン周辺にて、東アジアから米国に渡った屏風などの古画を研究することが目的でした。
これまで、「風景」と人間の意識や社会との関係を思考する絵画を制作してきましたが、
とりわけ 2011 年の震災以降、東洋的自然観と人間のあり方を示す古来の美術品が、グロ
ーバル世界の「中心」とされるアメリカ社会でどう位置づけられているのか、現地学芸員
や修復家とともに見直したい気持ちが高まったのです。東洋元来の自然観を西洋社会の中
で考察し、議論を重ねていく研修の日々は刺激的で、その経験をもとに、地球環境とグロ
ーバル化した人間社会の未来に有効な価値観を見つけたいという姿勢で、意欲的に作品を
展開することができました。その後、東京での大規模な個展や、モスクワでの展覧会で発
表した作品群は、その成果でした。

そのような流れの中、2020年2月、ロンドン芸術大学・チェルシー・カレッジ・オブ・アーツの招聘で、英国に向けて旅立ちました。EU離脱が決まった直後の英国で、「風景に溜め込まれた歴史・社会」というテーマでリサーチをしながら、滞在先の大学で講演やワークショップを行う予定でした。まだ、ヨーロッパにおいて新型コロナウイルスは、アジア特有の問題と捉えられていました。

在外研修時に身についたものがあつたのか、到着の翌日には現地大学の教員（アーティストや批評家）たちとすぐに打ち解け、忙しくも充実の日々が始まりました。大学のゲストハウスはテートギャラリーの真横にあり、名だたる美術館、ギャラリーに散歩するように通い、土地を写すフロッター
ジュのプロジェクトを進めてい
ました。（※01）チェルシーの
教員やアーティストと英国の
「風景」について議論をしたり、
紹介いただいた画廊にプレゼン
に出かけたり、あっという間に
数週間が過ぎました。



01 都市の地面を写し取り、そこから大判絵画を制作する。

少しずつヨーロッパにも新型コロナウイルスの問題が忍び寄っていましたが、英国はあまり動じない空気感のままでした。しかし、3月になり、12日の首相声明が出たことで事態は一変します。

「週明けに予定していたマサコのワークショップだけど、大人数を集めるのはまずそうだから延期にしよう」とホスト教員のパーティが伝えに来ました。「授業をどう続行するかは、週明けに学生たちの投票で決まるのよ。またお茶でも飲みながら考えましょう。」と、にっこり帰って行ったパーティと会えたのはそれが最後でした。

その週末は、シティー・アンド・ギルド大学の学長夫婦が、近所のギャラリーに誘ってくださり、リラックスして過ごしました。のどかなカフェで夜ご飯を食べて、「また来週ね」と言って別れましたが、彼らと会えたのもそれが最後となりました。

週が明け、いつもの調子で始まったチェルシーの朝でしたが、夕方には学生投票どころか、急遽、大学閉鎖の通達があり、皆の表情は変わっていました。

急いで5日先の復路航空券の目星をつけ、もう一人のホスト教員マーティンに相談に行きました。「来年、同じ時期にまたおいで。プロジェクトの続きはそのときやればいい。詳しくは、明日、事務方も一緒にお茶でも飲みながら決めよう」「うん、また明日」と言ってお別れした翌日、政府からの勧告があり、皆、出勤できなくなりました。そう、「また

明日」は来ませんでした。

そこから帰国便までの5日間で、みるみるうちにロンドンの風景は変容していきました。お隣のテートギャラリーを覗くと「今日が最後。しばらく会えなくなるから、お金はいらないよ」と特別展に入れてくれました。昨日まで賑やかだったパブは閉まり、観光客で溢れていたウエストミンスター寺院は、静かに堂々と天に向かって地面の底からせり立っているようでした。桜の花が綺麗でした。



02 「レイン・フロッタージュ」
雨によって写し取った地表

人の少なくなった街で、遠慮なく和紙を地面に広げ、最後の日までフロッタージュで土地を写し続けました。一度、警官が寄って来て「こんな時に、清潔じゃないから地面に触るなよ」と言われたので、その後は、青い顔料を塗り込んだ紙を地面に置いて、雨にフロッタージュをさせました。またお前かという顔をして近づいてきた警官に「地面は触ってないですよ！それに、この数日、会って話したのはあなただけだし！」と言うと「綺麗な青色だな。」と言って微笑んでくれました。和紙に、雨という自然の現象と地表の凸凹が相まって美しい柄が浮かび上がっていました。（※02）

欧州系の航空会社が次々とキャンセルとなる中、私を乗せた直行便は大阪に向けて飛ぶことができました。もう教員も学生もいなくなった空っぽの大学から、守衛さんがタクシーを手配して見送ってくれました。冒頭のテキストは、その静かで荘厳な街を横断していくタクシーの中の出来事から生まれたものです。空港でメールを開くと、「来年の春、また会おう！」「その時はハグ！」とホスト教員たちからのメッセージが届いていました。

帰国し、二週間の自宅待機が終わり、しばらくすると日本も緊急事態宣言が発令されました。担当している芸術系大学の遠隔授業を、自宅から手探りで始めている頃でした。学生たちとも会えないまま、オンラインの仮想空間で作品を鑑賞し、議論をし、ビデオの中で面談や打ち合わせをすることにエネルギーを注ぎました。そして、その他のほとんどの時間は、キャンバスに向き合っていました。身体を介し、絵の具という物質でキャンバスに触れ、変容させるという絵画の行為は、非常に具体的に世界に触れていることを確認することのように感じられ、ロンドンの地面に触れた最後のフロッタージュの感触を何度も思い出しました。

夏になって会うことができるようになった学生たちと彼らの作品は、ビデオの中とは違う凸凹や奥行き、触感があり、それらが仮想空間の中とは全く違う「存在」であることに気づかせてくれました。



開催延期や中止も覚悟しながら、完璧な準備だけはしておくことを画廊の人と合意し支度をしていた京都2カ所同時開催の個展は、国内の移動制限がやや緩和された秋頃に、できる限りの予防対策を施した上で、無事に開催することができました。この感染症時代の狭間のような会期に大掛かりな展覧会をさせていただき、みなさんにお出かけいただけたことは幸運としか言いようがありません。

絵画を鑑賞すること。それは、本来、身体を伴った行為であり、絵に近づいたり離れたりしながら、物質に目で「触れる」体験だったことを、今回の展覧会ほど意識したことはありませんでした。

会えなくなってしまう人たちと、身体ごと会える日はすぐには来ないかもしれず、トンネルの出口はまだまだ先にあるのかもしれませんが。不安はないとは言えません。けれど、14世紀にはミケランジェロ、17世紀にはレンブラントやフェルメールが、当時のグローバル化と長い疫病の時代に、世界と足元を同時に見つめながら作品を紡ぎました。それらが今なお私たちに光を与えて続けていることを噛み締めながら、歩んでいきたいと思えます。



*世界中の美術館やギャラリーで作品鑑賞の制約が続いています。前述の2020年秋の個展にお越しいただけなかった国内外の皆さんに、展覧会の肌触りをお伝えすべく、学芸員やジャーナリストの言葉を集録した記録冊子が、日本語版・英語版で刊行されます。『Future Willing 2020 安喜万佐子 'Chaos from Order, Order from Chaos'』企画・発行: 塩田京子 (ギャラリー 16) <https://www.art16.net>

安喜万佐子展 2020

‘Chaos from Order 〈時の庫〉’ 京都場

‘Order from Chaos 〈明日の地層〉’ galerie16